

1 プログラム概要

中国宋慶齡基金會在派遣した中国青年公益事業交流団 93 名が、3 月 13 日から 3 月 20 日までの 7 泊 8 日の日程で来日しました。（団長：井頓泉（セイ・トンセン）中国宋慶齡基金會副主席）

本事業は「JENESYS2.0」の一環として行われ、東京都、神奈川県、兵庫県、大阪府を訪問し、厚生労働省や内閣府のほか、様々な企業でのブリーフや、自治体、公益事業関係者、ボランティア、大学生との交流などを通じて、日本の公益事業分野に対する理解を深めると同時に、日本の一般市民との友好交流と相互理解を深めました。また、日本の最先端技術や歴史的建造物の見学、日本文化体験などを通じて、クールジャパンに直接触れ、日本に対する包括的な理解を深めました。

2 日程

3 月 13 日（日）

羽田空港より入国、浅草寺見学、オリエンテーション

3 月 14 日（月）

厚生労働省講義、中華人民共和国駐日本国大使館訪問、東京タワー見学、歓迎会

3 月 15 日（火）

第 1 グループ：（一社）日本経済団体連合会訪問・講義、（株）東芝講義・視察

第 2 グループ：東京ボランティア・市民活動センター訪問・視察、皇居・二重橋見学、江戸東京博物館見学

第 3 グループ：内閣府訪問・講義、日本大学法学部訪問・交流

3 月 16 日（水）

兵庫県へ移動

第 1 グループ：積水ハウス（株）講義、灘酒蔵見学

第 2 グループ：神戸市講義、しあわせの村視察

第 3 グループ：明舞団地活性化事業ボランティア視察・交流

共通：和風温泉旅館での日本文化体験

3 月 17 日（木）

第 1 グループ：和ろうそく絵付け体験

第 2 グループ：あしなが育英会 神戸レインボーハウス訪問・視察

第 1・2 グループ：エフピコ愛パック（株）西宮工場視察

第 3 グループ：大阪市環境局舞洲工場視察、ATC エイジレスセンター視察、大阪城見学

3 月 18 日（金）

舞子海上プロムナード見学、孫文記念館見学、人と防災未来センター視察、神戸港クルージング

3 月 19 日（土）

東京都へ移動、商業施設視察、歓送報告会

3 月 20 日（日）

羽田空港より帰国

3 写真

	
3 月 13 日 浅草寺見学 (東京都)	3 月 14 日 厚生労働省講義 (東京都)
	
3 月 14 日 中華人民共和国駐日本国大使館訪問 (東京都)	3 月 14 日 東京タワー見学 (東京都)
	
3 月 14 日 歓迎会 中原邦之 外務省アジア大洋州局 中国・モンゴル第一課地域調整官の挨拶 (東京都)	3 月 14 日 歓迎会 江田五月 日中友好会館 会長の挨拶 (東京都)



3月14日 歓迎会で挨拶する井頓泉団長
(東京都)



3月15日 (一社) 日本経済団体連合会訪問・講義
(東京都)



3月15日 (株) 東芝講義・視察
(神奈川県)



3月15日 東京ボランティア・市民活動センター訪問・視察
(東京都)



3月15日 皇居・二重橋見学 (東京都)



3月15日 江戸東京博物館見学 (東京都)



3月15日 内閣府訪問・講義 (東京都)



3月15日 日本大学法学部訪問・交流 (東京都)



3月16日 積水ハウス(株)講義 (兵庫県)



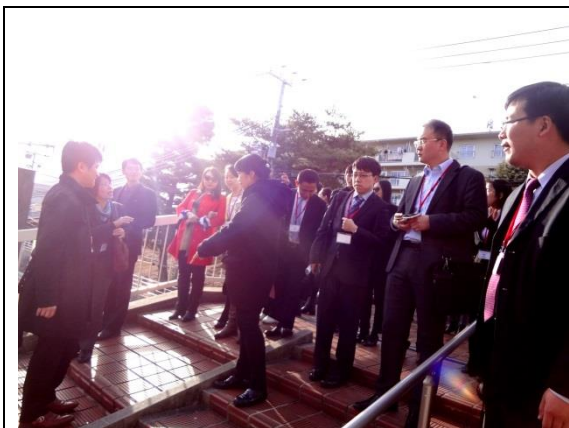
3月16日 灘酒蔵見学 (兵庫県)



3月16日 神戸市講義 (兵庫県)



3月16日 しあわせの村にて、神港園しあわせの家(老人ホーム)視察 (兵庫県)



3月16日 明舞団地活性化事業ボランティア視察・交流
(兵庫県)



3月17日 和ろうそく絵付け体験(兵庫県)



3月17日 あしなが育英会 神戸レインボーハウス訪問・視察
(兵庫県)



3月17日 エフピコ愛パック(株)西宮工場視察
(兵庫県)



3月17日 大阪市環境局舞洲工場視察
(大阪府)



3月17日 ATC エイジレスセンター視察
(大阪府)

	
3月17日 大阪城見学 (大阪府)	3月18日 舞子海上プロムナード見学 (兵庫県)
	
3月18日 孫文記念館見学 (兵庫県)	3月18日 人と防災未来センター視察 (兵庫県)
	
3月18日 神戸港クルージング (兵庫県)	3月19日 歓送報告会で訪日の感想を発表 (東京都)

4 参加者の感想（抜粋）

<第1グループ>

〇一、最も印象的だったこと

（株）東芝でのブリーフと視察、そして谷野作太郎元東芝社外取締役（日中友好会館顧問）のお話。

- ①東芝の先進技術や沿革、優れた製品について知ることができた。
- ②東芝のCSR（企業の社会的責任）に関する理念、方向性、貴重な経験、とりわけ中国サッカーFAカップや青少年サッカー界への支援について理解を深めることができた（私自身サッカー関係者であるため、これらについてとても親近感を覚えるし、実体験もある）。
- ③訪問の終わりに、谷野先生（かつて中国で仕事をされ、中国文化にも精通しておられる）に、中

国語で何かお言葉を頂けないかお願いしたところ、真摯で心のこもったお話をして下さった。日本の大先輩である方の、一人の外交官としての中国と日本への熱い思い、そして両国の友好と平和への生涯をかけた願いというものがひしひしと感じられた。最後は「中日両国の友情が永遠に続きますように」との言葉でお話を締めくくられた。

二、帰国後伝えたいこと

- ①CSRの活動について、日本は政府と公益団体と企業の三者が、理念の認識、運営のしくみ、制度の保証等の面で優れた経験を有しており、我々企業も更にこれらを見習っていくべきである。
- ②日本人のやり方はきめ細かく周到、計画性や全体性を重んじる。日本は国土が限られているとはいえ、その建設計画には秩序や筋道がきちんと示されており、この点は青年指導者たる我々も学ばなければならない。
- ③中日両国には二千年余りにわたる発展の歴史があり、代々隣国としておつきあいを重ねてきた。我々はこれからもより多くの活動を通じて交流し、信頼を深め成長を共にすることで、中日両国の平和と友情を育てていくべきである。

○各方面の方々が私にこのような機会を与えて下さり、今回の活動に参加できたことにまずは感謝したい。そして団にあっては優秀な青年実業家の面々と知り合えたことをとても光栄に思うし、視察においては様々な企業を訪れたことで、学校では学び得ないたくさんを知ることができた。まさに収穫大なり、である。

中でも最も印象に残っているのは、エフピコ愛パック（株）の障がい者雇用についてである。なぜなら、企業での障がい者雇用率2%という政府の法定基準に対し、エフピコ愛パックではこの基準を遥かに上回り、且つ健常者の社員と同等の待遇であるばかりか、業務上の危険を避けるため数々の安全対策が講じられていたからである。これは非常に参考になったし、学ぶべき点だと思った。

○私は今回経済界の一員として訪日した者だが、この度の交流で最も印象に残ったのは、厚生労働省による日本の社会福祉に関するブリーフであった。来日前、私は日本の社会形態や国民の生活について余り理解していなかった。しかし（医療や高齢者対応を含む）社会福祉についての厚生労働省の説明は大変すばらしく、日本の実務を重んじる精神を物語るものであった。合理的で科学的な問題解決システム、真面目で厳密な任務の執行、明確な職責分担等は、我々が深く研究し学ぶべき点である。特に中国の実情に合わせて各種福祉制度を改善し、システムとしくみを整備していく上で、日本の制度設計の出発点は正しいものと言えよう。全ては国民のより良い暮らしのために、である。社会の発展のそもそもの目的は、人類の生活をよりすばらしいものにすることにほかならない。そのために私は努力するし、情報や方法についても伝えていきたい。日本の優れた面を知り、学ぶよう周囲に働きかけていければと思う。

○日本経済団体連合会への訪問を通じ、日本の社会団体の運営モデルについておおよそ理解することができた。我が商会のこれからの発展にとって大変良いお手本になるだろうと思う。これ以外にも、日本の経済団体がどのようにアフリカの公益を支援しているのかということも私たちが知りたい事柄の一つであった。中国と日本はお互い隣国として、今やその二国間関係の枠を飛び越え、第三の国際関係、特にアフリカ諸国との協力にも着手している。必ずしも順風満帆とはいかないだろうが、それでも共にテーブルについて討議し、交流するのは良き始まりだと言える。そうしてこそ、お互い消耗や足の引っ張り合いを避けつつ、共に協力へと邁進する共存共栄の局面を生み出せるのではないだろうか。

「中日両国は子々孫々にわたり必ず仲良くしていかなければならないんだ。両国の友情は永遠に続いていくべきなんだよ」。齢 80 になろうかという日本の元中国大使の谷野作太郎氏はそうおっしゃった。その時の場面は今でも私の脳裏に焼き付いている。氏は更に「皆さんのような若い人たちが日本に来て下さってとても嬉しい。しかも多くの方がこれが初めての来日だという。だけど、この次は是非ともご自分でいらっしゃい。そうしてこそ、より深く日本のことがわかるだろうし、より多くの日本人とも友だちになれるでしょう。」と述べられた。谷野元大使は一貫してひたすら中日友好に尽力された、両国の国交正常化後、最初に中国に赴任した職員の一人である。同様に叡智に富む人物としてもう一人、今回の代表団団長である井頓泉氏がおられる。団長は訪日中ずっと私たちに強く言い続けてこられた。常に平常心を保つこと、偽りのない客観的な目で日本と向き合い、この国を理解しようとする。まさにその通りである。私にとってこの初めての訪日は本当に心に残るものだったし、得たものも多かった。日本の街も環境も施設も自分の想像以上にすばらしかった。環境は美しく、街は近代的で、人々は穏やかで謙虚だ。何を見ても洗練されたシンプルさとデザイン性にあふれている。もう全てがこんな風で枚挙にいとまがない。そして、ふと私は幾度となく考えてしまうのだ。「中国はいつになったらここまでになれるのか？日本はどうして今のように発展できたのだろうか？彼らを突き動かしてきたものとはいったい何だったのだ・・・？」問いは絶えない。理解すべきことはもっと多い。ただ何であれ、私がみんなに言いたいことはこうだ。第一に中国と日本は二度と再び戦ってはならぬということ。代々仲良くしていかなければ、共にただ敗れ去るのみである。第二に日本は良い国だということ。多くの普通の日本人は人がよく、中国人を歓迎してくれている。第三に中国の若い人たちは、もっと日本のことを知るべきだということ。日本に来てみて日本人と友だちになるべきだ。絶えず変わっていかなければ進歩もない。交流と歩み寄りが平和を築き上げていくのだ。最後に、日中友好会館の心尽くしの手配と中国宋慶齡基金会の代表団派遣に本当に感謝したい。日本で 35 歳の誕生日を祝ってもらったことは、一生忘れないだろう。あの場面、あの想い。共に祈ろう、中日両国の友情が永遠であることを、両国の国民に更なる幸せが訪れることを。私は本当に日本が好きになってしまった。そう遠くない日にまた、日本の街角をそぞろ歩けることを願っている。

<第 2 グループ>

○今回の訪問で二つ印象に残ったことがある。一つは東京ボランティア・市民活動センター視察時に目にした独特なボランティアサービスのあり方である。交流や情報の共有という方法で、それらの受け手や受益者の範囲を広げている様子に、なるほど、公益とはこのような形で行うこともできるのかと思った。二つ目は兵庫でエフピコ愛パックスの工場を視察した際のことで、障がい者であっても尊厳ある形で労働の報酬を受け取り、平等に働く権利を享受している様子に感動させられた。世界中の障がい者が、皆このように平等な就業によって、自らの生活を支えていける日を心待ちにしている。そうならば、社会の安定や公民意識の向上に大いに役立つことだろう。

帰国後は、私が目にした本当の日本について身近な家族や友人、同僚たちに話して聞かせ、もっと日本を知り理解してもらいたいと思う。歴史的にも中国と日本には長い友好の積み重ねがある。これからは仕事においても生活の中でも、中日友好のために微力を尽くしていきたい。中国と日本は共に世界の大国であり強国であるから、両国の友好共存はアジア太平洋地域の経済や文化、軍事的な安定に有益であるばかりか、長期的な平和の維持に寄与する重要な力なのだ。

○神戸のしあわせの村を視察した際、そこでお年寄りたちが手厚くお世話されている様子に感動を覚えた。中国も日本と同様の高齢化問題を抱えている。いかにこれに対処していくかが両国共通の課題となった今、中国が日本の経験に学ぶことは多い。

また、東京ボランティア・市民活動センターやあしなが育英会の視察では、支援を受けてから自分が変わったという人、或いは自分の人生の目標を見つけたという人がたくさんいることを知り、自分の行動が実は他の人にも影響を与え得るということを目の当たりにした。地下鉄の中で、私はまたある標語を目にした。「人のためになる人になろう」。すぐに雷鋒を思い浮かべた。人は皆他の人に影響を与え得る人間になることができる。日々の暮らしを愛し、人を愛する熱い心がありさえすれば、そして前向きに物事に向き合う姿勢があれば、私たちにはそれができるのだ。

「人のためになる人になる」この言葉はきっと、これから私に長いこと影響を与え続けるだろう。そんな人になれるよう努力していきたい。

○今回の訪問では、幸いにも厚生労働省の医療、介護、年金に関するブリーフを受けることができた。説明を聞き、日本の健康保険制度が体系的で科学的なものであることを大まかに理解できた。いくつかの加入方法によって、国民皆保険制度が確立され、誰もが等しく治療を受ける機会と、費用面での安心が与えられている。いま中国でもちょうど医療改革が行われており、医療保険制度の整備が重ねられているところである。北京での現行の医療保険制度は日本のものに近く、やはり国民が個別の状況に基づいてそれぞれの医療保険に加入し、日本同様ほぼ全ての住民をカバーできている。しかし、高齢化の急激な進展に伴い、中国も日本と同じように医療保険の給付費負担の増大という問題に直面しており、北京でも DRG（国際疾病分類に基づいた診断別関連群）に基づく給付費の支払いが試みられているところだ。こうした改革の該当する部分に関しては、中国は日本にその細部を学ぶべきであろう。そうして共に発展し、変革を促し、より万全な医療保険制度を構築することで、国民生活の改善と便利さを実現できたらと思う。

日本の介護保険制度は、わが国にはないものだ。これにより高齢化社会における老人の晩年期介護の問題は、さしあたり解決されよう。しあわせの村の視察では、この制度が良い効果をもたらしていること、高齢者介護という難題を実際に解決している様子がよくわかった。わが国で高齢化が日増しに重大な社会問題となりつつある今、日本の介護保険制度は我々が学び、改革していく一つの方向性を示していると思う。今後さらに調査研究を行い、中国にもこれを導入することで、わが国の実情に見合った介護保険制度を確立し、安心できる晩年を実現していくべきだろう。

○来日するまで、日本人は厳格で融通がきかず、その上中国人に対して余り友好的ではないのではと考えていた。しかし来てみると、日本人は気さくで親しみやすく、しかも普通の人たちは中国人にとっても優しく大変親切だった。

社会的公益事業とは、その資金のより多くを市民や企業に頼ることによって、NGO や NPO としての役割を果たしていくべきであり、余りにも国や自治体の支援を当てにしているのは維持していくのが難しい。それゆえ、国民の公益意識やボランティア精神の向上がとりわけ必要となる。この点で日本は先を行く存在であり、私たちもこれに学ばなければならないと思う。

○印象に残る出来事はたくさんある。例えば、

- ①時間に対する意識の高さ。旅程管理が正確できっちりとおり、バスでさえ予定通りに到着する（渋滞の問題をどうしているのか、これは不思議ですらあった）。人の都合に合わせて適度に時間を調整したりなどはしない。社会的ルールはある意味単純ともいえる。
- ②日本のビル建築について。もっと直接的に言えば地震との関係について。日本に到着した1日目、随行者は自信を持ってこう言った。「日本は地震が多い国ですが、もし地震が起ころうと心配しないで下さい。日本の建物は決して倒壊などしませんから。」後日神戸を訪れた時、日本の建築

の基本設計のことを知った。ほんの小さな一つの工夫で、いかに多くの命を救えるか。中国の建設業界は、もっとしっかりこうしたことを研究し、普及を図っていくべきだろう。これも人間本位の責任ある姿勢の表れなのだから。

- ③道路の横断について。実は日本人でも信号無視の例を見かけたことはある。しかし、もっと目についたのは、その運転意識である。来日の初日から注意して観察していたのだが、まさに全ての車が互いに「どうぞ、どうぞ」と譲り合っているのだ。

帰国してから伝えたいことは、とてもシンプルである。聞いていた日本の良さというのは、皆本当のこと。この目で見たことが全てだ、偽りなどない。機会を作り、やはり自分の両目とその心で感じ取って来てほしい。

<第3グループ>

○最も印象深かったこと

- ①高齢者の方々の精神状態がとても良いということ。ドライバーや公益事業、介護などその職業を問わず、どなたからも中高年のやつれた印象などは感じられなかった。表情や容姿、体つきからしゃべり方まで、その人が尊厳ある暮らしをしていることがこちらに伝わってくるようだった。
- ②ホテルでの使い捨てアメニティグッズの質がとても良いこと。繰り返し使えるし、回収率も高く比較的エコだと感じた。また宿泊客も（例えば温泉内などで）公共の物を大切に扱っていた。
- ③日本の大学生も中国の李白や杜甫、莫言などについて知っており、こうした文学に関する話題でおしゃべりした時には空気がとても和やかになった。宮崎駿やトトロ、久石譲、そして村上春樹や渡辺淳一、東野圭吾らのことを私たちが知っていて、しかもとても人気だと言った時、彼らは明らかに嬉しそうな様子だった。これからは文化面での交流も深めていくべきではないかと感じた。「国の交わりは、民の相親しむにあり」とよく言われるが、この「相親しむ」ためには、まず相手に対するお互いの正しい理解が不可欠であり、意識的にこの面での交流活動を行っていくことが大切であろう。
- ④日本の若い人たちは、どうやら地元で働きたいという意識がわりあい強いようだ。おそらく都市化がある程度まで行きついた時、中小規模の町であっても若者に十分な就業の場を与えられるのだろう。高齢者には老後の安心感が、若者には若さゆえの楽しみがある。つまり家庭という社会の最小単位がうまくいって初めて次に地域のこと、そして街や国のことをしっかり考えていけるのである。

○明舞団地で、地域再生に向けたボランティア活動に関する取り組みを共有したことで、日本の地域社会におけるまちづくりの特徴というものがわかった。印象的だったのは、地方自治体と大学の研究室との強いパートナーシップである。活動報告を聞いた後の学生ボランティアとの交流では、日本の大学生たちのボランティア活動にかける熱意と献身を一層強く感じた。中国でもいま地域におけるまちづくりが烈火のごとく盛んに行われているが、地元政府といかに良い協力関係を築き、住民の主体性を刺激して、まちおこしを行っていくか、更に一步踏み込んで考えていく必要があるだろう。

○今回中国青年公益事業交流団の訪日プログラムに参加できたことをとても嬉しく思っている。このプログラムを通じ私は日本に対して強い印象を抱いたのだが、それを主に次の4点にまとめてみた。

- ①街の環境と都市整備のレベルの高さ。東京から神戸へ、そしてまた大阪へと移動したが、いずれも環境が素晴らしく、きれいで清潔、整然と運営される都市交通網など、街の整備と管理水準の

高さを物語るものであった。

- ②国民レベルの高さ。公式プログラム中であっても、街中での個人的な買い物のさなかであっても、私自身このことを肌身で感じた。店と客との間、道で行き交う見知らぬ者同士、業界の違う者同士の間でも、日本では互いを思いやり相手を敬っていたことが忘れられない。お辞儀ひとつ、挨拶の言葉あるいはお詫びの言葉ひとつでも、それが外国人を含む全ての人の心に温もりをもたらすのだ。
- ③災害などの危機に瀕した際、それに対応しようとする意識と行動力には敬服するばかりである。人と防災未来センターで見た1995年の阪神淡路大震災の映像資料は非常に痛ましいものだった。しかし、日本の人々は地震に対しても決してひるまず、自助の力を発揮しようとする。そして震災後には、当時の対応や施策についてしっかり見直しをすることに、また感服させられるのである。
- ④日本の公益財団法人制度というものがとても印象に残った。公益事業の活動とは、人々の心より発せられる愛護や助け合いの思いの表れである。日本の社会では、この制度の効果的な実施と充実により、愛の種が社会の隅々で根を張り、芽を出し実を結んでいる。そうしてプラスのエネルギーがそこかしこに満ち広がっていくことで、極めて大きな役割を果たしているのだ。

日本では本当にたくさんのことを知った。まさに百聞は一見に如かずである。帰国後は今回の訪日で自分が得たものや感じたこと、考えたことをしっかりと総括し、人と人との愛や敬いの心、人と自然との共存や調和について、身近な人々に進んで伝えていきたい。また、公益活動に積極的に参加し、思いやりの心を尽くせればと思う。そして、中日関係のこれからの発展にも関心を寄せ、その友好に微力を捧げていきたい。

○まず最も印象的だったのは、日本人の細部へのこだわりと製品のユニバーサルデザインのことである。例えばATCエイジレスセンターを視察した際に紹介された製品は、そのどれもが細やかな気配りと思いやりという設計者の考え方を体現するものであった。

また、視察で訪れたり泊まったりした街（東京、神戸、大阪など）は、どこもとて清潔だった。私自身嬉しかったのは、日本の大型バスにはあの特有の嫌な臭いがしなかったことだ。車に酔いやすい身としては、これは非常に重要なことなのである。お陰で訪日中の数日間、酔ってしまったのはたった1、2回ほどで、とても気分よく過ごすことができた。

そして、今回私たちの分団の通訳や随行を担当していたスタッフの方々にも感謝したい。真面目でしっかりとした仕事ぶりだけでなく、能力も高かった。旅行中、訪れる先々についての通訳さんの説明で日本文化への理解が深まったし、優れた中国語力にも感服させられた。ともあれ、この度の訪日は得るところが多かった。

もし、もう一度日本を訪れるチャンスがあったなら、今度は日本の農村を訪ねてみたい。日本のことをもっと広く深く知りたいのである。帰国後は、まわりの人にこう伝えたい。日本人への偏見を捨て、もっと将来的な眼差しでこの国、この民族と向き合うべきだと。また、私は今回交流した兵庫県立大学の学生とも連絡先を交換した。自分の行動で、中日友好交流のための小さな貢献ができればと思う。そして「日本の友だち」を万里の長城にも連れて行ってあげたいし、中国の風俗習慣にも触れてもらいたい。中国と日本の友好関係がずっと続いていくことを願っている。

- ①厚生労働省によるブリーフでは、日本の社会福祉制度について知ることができた。人々が等しく医療サービスを受けられる制度が確立されているばかりでなく、あらゆる福祉が平等をその前提としている。確かにそのためにはある程度効率を犠牲にすることもあるだろうが、私たちには公

平と平等もまた保証されていなければならないのである。また、制度と共に細かな管理システムも構築されており、それは政府への厚い信頼感の上に成り立っていることがわかった。

②内閣府での公益財団法人制度のブリーフでは、それが公益事業に対する日本国民の支持の表れであることを知った。まるで市民一人ひとりが皆、公益心を抱き、進んで社会的責任を担おうとしているかのようだ。それこそが、公益事業をうまく行っていくための土台にほかならない。

③ゴミ処理場と人と防災未来センター、そしてATCエイジレスセンターは、まさに最も考えさせられた所だった。